ナナシのハナシ

樹羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナナシのハナシ

【Nコード】

N6607X

【作者名】

樹羅

【あらすじ】

NARUTOの登場人物、テンゾウこと第七班臨時隊長ヤマトに成り代わった男の話。

過去と現在を行き来しつつ、原作の時間軸を目指して連載していきます。

大体はほのぼの・ギャグで進行予定。目も当てられない様な駄文です。生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

どうかご教示、は下げました！ 大幅改訂についてはまだ検討

中
で
す。

事の始まり

俺はさ、ちょっと国内旅行が好きなだけの、ごく普通の男だったわけよ。

それがさあ、火サスのクライマックスシーンで有名な東尋坊に観光に行ったら、ものの見事に足を滑らせちゃって。

きつと打ちどころが悪かったんだろっね。即死だよ、即死。

分かる？ この虚しさや悔しさや恥ずかしさの入り混じった複雑な気持ち。

分かんねえだろうなあ。俺だって「ねえねえ当時どんな気持ちだった？」って聞かれても、もう答えらんねえもん。

…ま、それはいいんだよそれは。

問題は死んだ後、たぶん輪廻転生した後のこと。

ぷにぷにしたもみじの様な手の平に、ゆで卵みたいな赤ちゃん肌。

そのくせ中身は立派な大人で、おしめを替えられる度に泣き喚く変な赤ん坊。

「え？ 輪廻転生って記憶も引き継ぐもんだっけ？」

疑問符は飛び交うが、それに答えてくれる人は一人も居らず。

そりゃ母親も父親も他界済みなのだから当然だ、と知ったのは自分を世話している女性が母親では無いと聞いた時のこと。

当時の俺、三歳。

…なあ後見人さんよ、それは三歳児に言うことでないとは思わんかね。

しかし、しかし俺はがんばった。

三歳になって初めてここがNARUTOの世界だと気づくような馬鹿でも、かわいそうで哀れな子供だという視線を向けられ続けようとも、両親が居ないのだからと当然の様に忍者の道を進まされようとも、進んで直ぐとんでもない事件に巻き込まれ三日三晩生死を彷徨おうとも…。

俺はがんばった！　がんばったとも！！

だからこそ、一つだけ言わせてはくれまいか。

いや、言うだけでは飽きたらず、長々と語らせてはくれまいか。目の前の暗部の教育係だと言う男が如何に見覚えのある銀髪をしているのかとか、語尾が伸びる気の抜けた喋り方に聞き覚えがあるだとか、そつえば俺の顔は能面とまでは言わないが感情を感じさせない顔つきだとか、実は俺すごく貴重な血継限界の持ち主なんだよなとか、今のコードネームは「テンゾウ」なんだよね、とかとかとか！！！！

「ふーん、テンゾウね。他は何でもいいけど、足だけは引っ張らないでよ」

「…誠心誠意ががんばらせていただきます。先輩」

こいつ良く第七班の上忍師を勤められたな。

狐の面をつけていてもヒシヒシと伝わってくる性格の悪さに、俺は内心ため息を吐くのだった。

事の始まり（後書き）

ナナシ（主人公の呼称はこれで行きます）が親について聞かされた年齢を、五歳から三歳に訂正いたしました。

訂正した理由についてはまた後日。

一応、NARUTO考察サイトやwikiを参考にしつつ、矛盾の無い様に執筆していきたいです。はい。

ナナシの孤独

俺の前をひた走る銀髪の男。

暗部の中でも優秀な技量を誇る彼は、新人である俺の教育係であり先輩でもある。

そしてそんな彼は暗部名をギンと言うのだが……。……うん、なんていうか、俺は彼の本名も出生も未来も知っているっていうね。

ああなんと気まずい、と嘆いてみても、先輩からしてみればそんな”事実”は絶対にあり得ない事なわけで。

と言うことは俺が挙動不審な行動を取れば、疑われるのは”事実”ではなく”無実”の裏切りなのだ。

：こりゃあたまつたもんじゃねえ。と、仕方なく俺はへーこらと尻尾を振るかわいい後輩を演じ始めるのであった。

「先輩、目的地付近に到着しました」

ザッと地面に降り立ちホルダーに差してあった巻物を開く。すると出てきたのは周辺の地図に赤いバツテンが書き込まれた物だった。任務をこなす以上、何よりも大事なのは正確性だ。

「確認は大事大事」と真剣に巻物に目を通す俺だが、先輩は軽く頷くだけでちらりとも巻物に視線を寄越すことはない。

まあこれもいつもの事だ。相変わらず何事にもいい加減な先輩である。

「今回の任務は他小隊による重要資料奪取任務のサポートです。後日合流予定の小隊のため事前準備にあたります。詳しい任務内容は説明された通りです、繰り返しは必要ありませんね？」

「もちろん」

「では、俺は先に行ってますので」

ひらひらとどうでも良さげに手を振る先輩に見送られ、俺は一人寂しく任務に向かう。

事前準備の内容はほとんどが俺にしか出来ない事、つまりは木遁を使用した作業ばかりなのだ。

先輩からしてみれば、あまりやる気の出る内容ではないのだろう。

…その心境は十分に理解できるのだが、俺の教育係に当たった以上は諦めていただきたい。

里唯一の木遁継承者となれば、里上層部としては有効活用しないわけにはいかないのだから。

…たとえそれが、遠い未来に木の葉の里を危機に陥れる忍者の残したものであるうとも。

だからなのかそうではないのかは分からないが、俺には友人と呼べる人間が全くもって居なかった。

それどころか家族も居ないし、近所の人間や職場の人間と関わることさえあまり無い。

こうして任務から帰ってきて、出迎えも無ければ労ってくれる人さえ居ないのだ。

どれもこれも木遁継承者という貴重すぎる人間だから…、だと思

たい。切実に。

「孤独だ…」

一体何度ペットを飼おうかと思ったことだろうか。

しかし暗部という職業では連日家を空けることなんてザラにあるので、未だ実行に移すことはできていない。

だからその代わりに、俺はいつもの様に印を組んだ。するとポフツという白煙と共に目の前に自分の分身が現れる。

そこにさらに加えて変化の術だ。いくら何でも自分と同じ姿をした人間を愛でる趣味はない。

少して目の前に現れた猫は、げんなりとした表情をしていた。

そりゃあ影分身なのだから嫌がるのも当然なのだが、その上に影分身が感じた嫌な気分が、術を解いた瞬間に俺にまで伝わる諸刃の剣だ。

だが俺はやめない。もはや今の俺にとっての癒しは、これだけしか無いと言っても過言ではないのだから…！

ギユツ

ふわふわとした毛並みに獣臭い匂い、暖かい体温。正しく猫である。木分身ではなく影分身を使っているのは、木分身だとリアルタイムで分身からの情報が伝わってくる。というのと木分身からは木材の匂いがするから、つてのが理由だ。

猫から木材の匂いとか冗談じゃない。俺はこの獣臭さが好きなんだよ。

さらにギユツと力を込めてクンカクンカと匂いをかぐと、分身が抗議をするように俺の肌に軽く爪を立てた。

我慢しろよ、どうせ俺も後で自己嫌悪に陥るんだから！

「あー…猫飼いてえ…」

キーキーキヤーキヤーうるせえんだよ、近寄んなクソガキ。
と捻くれまくっていたあの学生時代の方が楽しかっただなんて…。
信じたくない。

ナナシの孤独（後書き）

忍者学校には通っていない、という体で書くことかと思っていましたが、ヤマト隊長もちゃんと学校は卒業しているんですね。仕方ないので方向転換。隊長の学生時代が気になります。

ナナシ、気づく(前書き)

ここから一区切りつくまで過去編に入ります。読みにくくてすみません。

ナナシ、気づく

>>当時三歳 自宅にて<<

俺の、いやむしろ日本国の常識では、三歳と言つのはまだまだ”赤ん坊”あるいは”幼児”に分類される年齢である。

喋りだつてまだまだ拙いし、字なんか自分の名前さえも書けない子供が多い。

だがどうにもこの世界での常識ではそんなことは無いようで、突然母の再婚相手であるらしいおっさんに呼び出されたかと思うと、三歳児に言うことでは無いとんでもない事を暴露されるのであった。

「実は、君に世間一般の常識と教養を身につけてもらうため、来月から忍者学校に通ってもらうことになった」

「にいうじあがっこお…ですか？」

「に、ん、じゃ、が、っ、こ、う。だな」

「…うあい」

舌が回らねえんだよ。仕方ねえだろ！

と内心では悪態をつくのだが、表面上では悲しそうに落ち込んだ振りをする。

俺は中身が無駄に大人な分、体と頭のギャップが大きすぎて、こういった弊害が良くあるのだ。

舌が回らないのも、子供の短い舌で大人の喋り方をしようとするから、こんな事になってしまっているのだろう。

ある程度体が成長すれば治ると分かっているから、俺自身はそこま
で気にしてはいないのだが…。

見守る側からしてみれば、心配になるのも当然といった所だろうか。

しかし…、忍者学校ってなんだ？

俺はおっさんによる説明を聞きながら必死に考えていた。

なにせ俺はまだ、ここがどういった世界なのかを正確に把握してい
ないのだ。

現代日本とはまったく違う世界だ、というのは良く理解しているの
だけれど、だからといってそれ以上は分からない。

外出自体もあまりしていないし、幼児向けの絵本しか読まさせても
らえなかったから、当たり前前なんだけど。

……忍者って冗談だよな？ ただそういう設定の幼稚園なんだよな？
ちらっとおっさんの様子をうかがった。……だが、おっさんは真面目
に俺の将来について語っている。

………そういえば、俺が住んでる場所は”木の葉の里”だったけな。
で、忍者学校＝アカデミーだとしたら、ここは、こここの世界は。

「あ、あの！ おじさん、のっ、しおと（仕事）なうでしたっけ？」

「ん？ ……火影側近という、この里で一番えらい人の補佐をする仕
事だ」

つまり原作でいうシズネと同じポジションですね分かります。

ナナシ、上げて崖から突き落とされる

ちよつとその奥さん聞いてくださいよ。

なんか俺、天涯孤独の身なんですってよ。といつてもまあ、この世界じゃそこまで珍しくもないんですけどね。

え？ ”この世界” って何だって？

えーと…、奥さん週刊少年ジャンプって読まれたことありますか？

あ、ある。良かった良かった。

俺が住んでる世界ってね、ジャンプで連載されてる漫画「NARUTO」の世界なんですよね。

つまり戦争や敵による襲撃が割りと頻繁にあつて、人がバツバツと死んでいくような世界なんですよ。

…だから天涯孤独でも珍しくないと言つてことです。お分かりになりましたか？

そして本題はここから。”天涯孤独”を踏まえた上でお聞きになってください。

暗殺戦術特殊部隊、通称「暗部」は天涯孤独の人が多くそうですよ。

……でね、俺これから忍者学校に通わなきゃいけないんですって。

死亡フラグ立ちすぎだろおおおおお！！！！

とは言っても俺だって健全な男の子だ。

男の子が憧れるジャンプヒーローと同じ立場に立てるとなれば、まったく期待や高揚感が無いわけではない。

みんなが一度は思う「自分の体がもう一つあれば」ってのも出来るし、手裏剣シュシュシュはもちろん、場合によっては口から炎を吐いたりもできちゃうのだ。

そんな風にちよつとぐらい夢を見ちゃう俺を、どうか責めないであげてほしい。

だって、その夢はすぐに打ち砕かれてしまふのだから。

この言葉の意味がどういう事か、というのは俺本人の口から説明させていただけよう。

事が起きたのはアカデミーへの入学が決まり、様々な忍者グッズを見に行った帰りのことだった。

火影補佐ということもあり、忙しいおっさんが途中で帰ってしまったのはまあ仕方ない。

三歳児を外に一人で放置するのはとっても非常識だと思うが、俺の中身はとくに大人なのだし。

それに一人で外出というのは久々の事だったのだ。むしろ喜んでいたので、それはおっさんには内緒である。

そして俺はウキウキとした気分で里を歩いた。

とても楽しかった。まだ三つしかない火影岩だって遠目に見た。

ここがNARUTOの世界だと知って最初はパニックだったけど、落ち着いてみれば様々な楽しみがあるのだ。

…だがな、俺よ。いくら浮かれていたからって、知らない人に声をかけられて、嬉々とした様子で近寄るのはどうかと思うぞ。

絶対これで、教育の行き届いていない馬鹿だから都合が良いと思わ

れたんだ！

「君、その君」

「？ おれ？」

「そう、君だよ君」

そいつはメガネをかけたヒョロヒョロノツポのお兄さんだった。ひよひよいと手招きをして、ちよつとだけ薄暗い脇道へと俺を招く。

その、にこやかな笑みは決して危機感を感じさせる物ではなく、ホイホイと釣られてしまった馬鹿な俺は、

「ありがとう。手間が省けたよ」

「…へ？」

その直後に、訳もわからないままプツツと意識を途切れさせた。

「…あ、目がつ、目が覚めたのね！ 良かった…良かった…！ うう…ッ」

…知らない天井だ。なんてことは無く、俺が目が覚まして最初に見たのは女性の泣き顔だった。

つい先日、おっさんから「あの人は私の部下だよ」と聞かされた女性。

たった三、四年ばかりのことだが、歩いて喋って名前を呼ぶまでの年齢まで育て上げた俺には、多少なりとも情が湧いていたのだろう。そうして女性が泣いている内に、おっさんと医者がやって来て身体検査をされた。

そして俺は、検査中に涙目にさえなっ居ないおっさんから、あの暴露大会が”つい先日”の出来事ではないことを聞かされる。

…そう、俺の頭からは二月ほどの記憶がぼっかりと抜け落ちていたのだ。

「に…かげつ、も？ なん、で」

「ここ数年のことだ。里内外で君ぐらいから十二歳までの子供の誘拐事件が相次いだ。被害者数は五十名以上、正確な数は分かって居ないが…」

そこまで言っつて、おっさんは一度口を閉ざした。

言っつのを躊躇っているのだろうか。あの、空気が読めず、相手の子供だろうとなんだろうと平然と現実的で高度なことを話すおっさんが。

ごくり、とだれかが唾を飲む音がした。

それは俺の物だったのだろうか、それとも誰か別の人の物だったのだろうか。

分からない。けど、おっさんは覚悟をしたように、また口を開いたのだ。

「帰ってきたのは、君、ただ一人だったよ」

また、女性が悲しそうに嗚咽を漏らした。

ナナシ、上げて崖から突き落とされる（後書き）

大蛇丸が初代火影の細胞を子供に埋め込む実験をしていたのは、どの時期なのか判明していません。

なのでこの小説の設定では、実験は大蛇丸が里にいる頃であって、でも犯行が大蛇丸の物だとは思われていない。ということになります。

ナナシの失敗

俺はその後、大事を見て暫くの間入院することになった。

だが幸いなことにも後遺症などが見られることはなく、一週間もせずは無事退院。

一体二ヶ月間で何があったのかは分からないが、恐らくほとんど体を動かすことはなかったのだろう。

幼児体型でさえなくなってしまった、やせ細った自分の体を見て、俺はげんなりとした表情を作ってしまった。

…すると、そんな俺の表情を見たおっさんは一言。

「…忍者学校はどうしようかと思っていたんだが…、やはり体力は取り戻さねばならないな」

確かに、今の俺の体はまるで虐待を受けているかのような体型だ。

まだ顔色が通常通りに戻ったからいいが、目覚めたばかりの頃は相当ひどかったに違いない。

そして自分の体から全身鏡に視線を移した俺を見て、「それに、」とおっさんは続ける。

「入学費と教材費も勿体無いしな」

おっさん、あんた金なら掃いて捨てるほどあるだろ。

そんなこんなで、一応「病で休学」という扱いになっていた俺は、

途中から復学することになったのだが…。

周りはみんな俺より年上だわ、途中から入ったから人間関係できてないわ。

で俺は結局散々な目にあうことになってしまったのだった。

元々子供は嫌いではないが、だからと言って好きなわけでもない。

中身が大人で落ち着いている俺からしてみれば、テンション高くあほ臭い事ばかり言っている子供は、どうにも受け入れがたかった。その上そついうのに限って、言うことはいつちよ前だったりするのだ。

対して成績も良くない子供に、それらしく悪いところを指摘なんてされてみる。

「はぁ？ お前には言われたくねえよ。床に伏してた俺と元気にアカデミーに通っていたお前とじゃ差があつて当然だろ、比べる対象でさえないんだよ。それをちょっと俺が間違えただけで、鬼の首を取ったみたいにキーキー喚きやがって。テメエは猿か？ あ？ 鬱陶しいから近寄んな」

子供の成長は早い。

三ヶ月もすれば数センチ単位で背が伸びてる事さえある。

だからだろうか、その時の俺は既にペラペラと喋れるようになっていて…。

三歳児が、流暢な喋りで難しい熟語を交えつつ見下したような目で年上を言い負かしたのだ。

ただし中身は成人男性。

すぐに「どんだけ大人気ないんだよ」と気づくも時既に遅し。
俺はアカデミーで要注意人物として扱われることになるのです。

なんていうか……うん……。恥ずかしい……！

コトリとイルカ

>> 現在 自宅にて <<

「いい加減にしろっ！」

ぼんやりと昔のことを思い出していたら、遂に腕の中の影分身が痺れを切らしてしまった。

変化の術を解いてバツと部屋の隅に移動する分身。

ギリギリと顔を歪めて俺を睨みつけるその様には、自分の顔だからかあまり恐怖は感じられなかった。

「すまんすまん」

アハハと苦笑しながら分身を解く。…と途端に俺の頭の中に入ってくる影分身の情報。

よっぽど苦痛だったみたいだなあ…。そりゃそうか、美人のお姉ちゃんならともかく、ゴツツイ男が相手じゃな。

影分身の苦痛がじんわりと浸透していく中、俺は同じようにのんびりと壁掛け時計へと目を向けた。

…八時ちょうど、三十分も時間が経過している。

なーにやってんだ俺は、と自分自身に悪態を吐いて、今度はちゃぶ台に手を突いて立ち上がった。

朝じゃない。夜の八時だ。任務明けにすぐに自宅に戻って、しかし出迎えないのは当然、冷蔵庫には飯さえも入っていない。

どうせ開けてもなにも食べられるような物はないのだ。面倒だから

外で食べよう、と財布だけもって家を出た。

最初は一楽で食べようと思っていたのだが、並ぶほどの人が居たので潔く諦めた。

忍者である以上、忍耐にはそれなりの自信があるのだが……。だからと言って任務で疲れた体に鞭を打つつもりはない。

けど一楽がだめならどこで食べようか。

ラーメンならともかく、レストランっぽいところには一人で行くのは気恥ずかしいし。

大体今日はあまりにぎやかな場所に居たい気分ではない。

せめて普通の、あまり家族連れが居ない定食屋ぐらいにしたいところだ。

と、思った所にぼんやりと薄明かりにつつまれた蕎麦屋が。

暖簾を照らす明かりは煌々とは言い難い明かりだが、今の気分にはちょうどいい薄暗さだ。

俺は「あつたかい蕎麦がいいなあ」なんて考えつつ、嬉々として暖簾をくぐった。

「あ」

「え」

そして手前側に座っていた人間を見て、すぐに外に出ようとした。が、グワシッと掴まれた腕でそれも叶わず。

くうっこいつ結構馬鹿力だなちくしょう！ と何とか逃げようとするものの、それもすぐに諦めさせられてしまった。

…店主の鋭い咎めるような視線。

それを受けてはいくら何でもこんな失礼なことは続けられない。

「ふふふ…、逃がさんぞコトリ…！」

「逃げないから離せイルカ…！」

アカデミーでの生活が苦痛でしか無かった俺は、さらなる苦痛を避けるために人を避けた。

そりゃ出来ることなら友人の一人や二人欲しかったが、いくら馬鹿な俺でも「う」「こ」「ち」「こ」言ってる奴らと対等に接することは無理だと悟ったのだ。

だから俺は、空気を乱すような真似はしないが、気づくとどこかに消えている。そんな影の薄い生徒を目指した。

…のだけれど。

俺が逃げようとするところからかひよっこりと現れて、同い年のくせに兄貴風を吹かせて生徒の輪に入れようとする。

どれだけ俺が拒否しようとも、絶対に諦めないしめげない！ そんな奴がこの”海野イルカ”だったのだ！

「…なんだよ、そんな見つめられたら照れるだろ」

俺が恨みがましく睨みつけていると、ざる蕎麦を啜っていたイルカがそんなことを言って頬をかいた。

冗談だとは分かっている、がどうにもイラッとくる反応だ。なので無視して天そばを啜った。うまいのだけど、それを素直に楽しめない自分が虚しい。

そして周りからの伺うような視線を気にして、無視し続けることは出来ない小心者な自分が悲しい。

「相変わらずみたいだなー。ほんと久々な筈なのに、全然変わってねえし」

「そういうお前も相変わらず…下忍か」

「下忍で悪かったなー！ エリート様と比べんなよっ」

そう言ってツンと唇を尖らせるイルカは、原作であるNARUTOに登場する年齢ではない。

幼さ残る顔つきはまだまだ下忍でもおかしく無いように見えるし、むしろ俺よりはイルカの方が普通だろう。

…しかし、まさか主人公の先生が同期だなんてなあ。卒業時期も在学年数も全然違うんだけどな。

「はいはい。で、お前っていつもどこ来るのか？」

「え？ あー…いや…」

機嫌を悪くされても困るので、と話題を変える。

するとイルカは少しだけ周りの様子を伺ってから言った。

「…一楽行こうと思ったたらすっげー並んでてさ。腹減ってたから諦

めてここ入ったんだよな」

「……………そうか」

自分と同じ理由だというのが何となく納得行かない。
やはり大人気ない俺なのだった。

コトリとイルカ（後書き）

コトリについては次で。

「ロトリ」の記憶

>> 当時六歳 教室にて<<

「ええっ！？ お前、もう卒業すんの！？」

「…まあ…うん」

ついポロツとこぼしてしまっ た言葉に、イルカが大げさな程の反応を示した。

それに周囲の生徒までもがザワザワと興味深そうに聞き耳を立ててくる。

思わず不快そうに顔をゆがめる俺だが、イルカはすぐに驚愕の表情を嬉しそうな物に変えた。

「すげえじゃん！ やっぱり成績って大事なんだなー」

そう言つて、それからブツブツと「俺もがんばらなきゃ…」なんて拳に力を込めるイルカ。

釣られて俺までキョトンとってしまった。

普通なら妬みやら何やらをぶつけてくる所だろうに、こついった所はやはり主人公に影響を与える人物ということだろうか。

…しかし。イルカのこの発言は、決して俺に良い印象ばかりを与えてくれるというわけではない。

第二次忍界大戦があつて、それが終結したかと思えば、またすぐ第

三次忍界大戦が巻き起こって。

こんな情勢の安定しない中で若い内に出世できたからといって、嬉しく思えるはずもないのだ。

もし、これが嬉しいと言うやつが居るのだとしたら、それはただの馬鹿か、よっぽどの愛国者だろう。

少なくとも俺は、戦争で喜んで国のために命を散らせるほどの愛国心は持っていないのだから。

「俺もがんばって、いつか立派な忍になる!」

だから、そう言って無邪気な笑みを浮かべるイルカが、俺には哀れなモノに見えてしかたがなかった。

>> 現在 蕎麦屋にて<<

「で、コトリ。お前今、何してんの」

隣からの声でハツとした。

無邪気な笑みだ。とても数年前の九尾の襲来で両親を亡くした様には見えない。

しかしこいつもいい加減分かったことだろう。忍であるというのがどういう事なのか、前線に出る者はどうあらねばならないのか。

「何って、忍者に決まってるだろ。卒業直後と変わってないよ」

「…ふーん？ そっか」

どうせイルカに暗部なんて言っても分からないだろう。

軽くあしらって蕎麦を啜る、とイルカは取り敢えずは納得したようだった。

：第一、一応暗部所属するのは極秘事項だしなあ。原作じゃ平然と「元暗部」とか言ってるけど。

「というか…そういうイルカこそ。中忍試験はまだ受けさせてもらいそうにないわけ？」

「うぐ…こ、コトリとは違うんだよ！ ほっとけ！」

また、だ。

俺は既に捨てた名前を呼ばれることに違和感を覚えて、ほんの少しだけ顔を歪めた。

しかしすぐに元に戻して、不満気なイルカに適当な言葉をかける。

今の俺は「空野コトリ」じゃない。暗部所属の「テンゾウ」だ。

昔の名前を呼ばれると、記憶がごちゃ混ぜになるからやめて欲しいけど、暗部に所属している以上それを言うことは出来なくて、俺は口先では適当なことを言いながら、内心では苦虫を噛み潰したような気分だった。

言えない、これを言ったらかならず否定されることが分かっているから。

ニコニコと笑って相手の言葉に同意さえしておけば良い。どうせそう会うことは無いんだ、イルカの顔なんて忘れてしまえ。

…なのに、

「大体コトリはいつつもわざと嫌われる様に立ち振る舞ってさ」

イルカだけは俺のこと、

「俺が遊びに誘ったら喜ぶくせに」

放っておいてくれないから。

「ひねくれ者は損をするぞ、ってうわああっ!?!」

「う、ううううう」

「なっ、何で泣いてるんだ!? 俺なんか言った!?!」

孤独が身に染みるじゃないかよおおおっ! もおおおおおおお!!

コトリの記憶（後書き）

暗部に入隊して毎日が寂しい。自分の影分身に癒しを求めらぐらいには寂しい。

そしたらたまたま旧友に出会って、少なくとも今よりは楽しかった学生時代を思い出す。

悲しくなって大泣き。

って話なんですけど、相変わらずわかりにくい。

因みに、ナナシが多少は学生時代を楽しんでいた理由は確実にイルカの実在です。

テンゾウとカカシ

確かに今の俺の忍者登録名は「空野コトリ」で間違いないし、「テンゾウ」というのはあくまでも暗部用のコードネームである。しかし暗部に登録してから知ったことを踏まえて考えると、「俺は将来主人公とヒロインが所属する小隊の隊長になる」という予測ができるよ。

恐らくその時に忍者登録名を「ヤマト」に変えなければならない必要が出てくるのである。

どうしたもんか、なんて考えてみても答えなんて出るはずもなく。結局、後のことは後で考えれば良いなんて結論に落ち着いて、俺はいつも通りの、でもちよっぴりいつもとは違った気分の任務に出た。

「テンゾウ、お前なんかあった？」

思わずギクツとする。

でも忍である以上それを表情に出すわけにはいかなくて、というか先輩にはあまり弱みを握られたくなくて。

俺はできるだけスムーズな動きを意識して、最後のターゲットを殺したばかりの先輩に返事を返した。

「特に覚えはありませんけど。何ですか？」

こんなに大量の死体を回りに散乱させておきながら、なんてシュールな光景なのだろうと客観的に考える。

絶対にこのタイミングでするもんじゃないだろう。世間話なんて。なのに先輩はとくに気にした風もなく言うのだ。

「いや、心なしか木遁が生き生きしてるような気がして」

「……………」

…木遁って術者の気分なんて物に左右される術だっけ？

と思つて、すぐに木遁はとて繊細なコントロールを要する術であることを思い出した。

そついや昔…、後見人のおっさんに「コントロールだけはやたら優秀だな」とか言われたなあ。

薄ぼんやりと昔のことを思い出しつつ、死体を埋め立てるために木遁を発動した。

任務の証明は必要だけど、死体をその辺りに散らかすのもいけないだなんて。なんて面倒なんだ。

まあ今は先輩の質問への返答の方が面倒なんだけど。…けどしなきゃいけないからなあ。

取り敢えず嘘はやめよう。別にやましい事じゃないんだし。

「…久々に旧友に会いましてね。多分それが嬉しかったんだと思います」

あまり自覚も無かったのだけれど、まさかここまでイルカのことを重要視していただなんて。

もう何年も会っていない奴に対して、なんて寂しい人間なんだと自己嫌悪する。

しかし、先輩はそんな俺の様子などまったく気づかないようで、ただただ驚愕を表情ににじませて言った。

「えっ！？ テンゾウ、友達なんて居たの？」

「……………」

思わずクナイを投げた。

しかし避けられた。

「どういう事ですか先輩！ 僕だって友人ぐらい居ますよ！！（死ぬ前はな！）」

「いやー、あはは。ま、あれだ、俺たちもまだ組んで間もない訳だから、仕方ない仕方ない」

「僕は組んで間もない相手を、勝手に”友人が一人もない奴”だなんて決めつけませんけどねっ！！」

絶対におかしい。俺は先輩に対してだけではなく、新しい職場の人間全てに人当たりの良い笑みを向けてきたはずだ。

暗部の面を被っているからこそ、大げさなほどに生真面目で人懐っこい振りをしてきたはずだ！

冗談でもなんでもなく、忍者にはそういった演技力が要求されるのだから、簡単に本性を見破られるはずもない。

…つまり、ということとは？

「…先輩。あなた、僕について随分と細かく事情を聞かされた様で

すね
「

……ははは

「あんの狸爺め……」

「一体どこまで喋りやがった、三代目えっ！」

ナナシとヒルゼン

カカシのとんでもなく失礼なイメージが俺に知れた任務の帰り。俺はまるでカカシの存在を無視するようにして、ビュンビュンと猛スピードで木々の間を駆けていた。

…どうせ、カカシを俺の教育係にしたのだから、木遁の秘匿を守ろうとする余りの苦肉の策だったのだろう。

特定の信頼できる人物と組ませれば、必要以上に秘匿を漏らす必要がなくなる、と。

しかしそんなの、所詮は苦肉の策でしかないのだ。そんな物が長続きするはずもない。

これは一言、物申さねばならないだろうと、俺は不機嫌なままに里を目指していた。

「あー…、あのねテンゾウ。別に火影様がテンゾウの個人情報を俺に与えたわけじゃなくて、」

「分かってますよ先輩。僕の学生時代まで調べたのは、あなたの個人的な判断でしょう」

何も怒りに任せて抗議しに行こうというのではない。

今後の事を考えて、いつまでも極秘にしておくには無理がある、ということが言いたいのだ。

…まあ、もちろんそれだけで済ませるつもりは無いけどね。

「それと…別にこれぐらいのことで、僕がカカシ先輩を尊敬する気持ちは変わりませんから」

ちよつとした、イタズラだ。
鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしているであろう先輩を放って、俺は瞬時に姿を消した。

「知っておったか…カカシの事を」

水晶玉に手をかざしていた三代目火影は、軽く咎めるような視線をこちらに向けて言った。
しかし本気で怒っているわけではないのだろう。
もし本気だとしたら、既に俺は殺気で冷や汗がとんでもない事になっているのは確実なのだから。

「ええ、ちよつとした好奇心で…と言いますか、暗部に入る人間は既にある程度の実力を持つ人間なんですよ？ そんな組織に入った新人に”教育係”がつくだなんて、おかしいじゃないですか。きっと周囲もそう思ってますよ」

「…むう」

やつと考えてくれる気になったか。
俺の言葉を聞いて思案するように唸り声を上げた三代目を見て、ホツと一息ついた。

ナルトのこともあってか、三代目はやたらと俺の木遁を重要視している。

しかし実際に木遁を扱う俺からしてみれば、所詮はコピーでしかない俺の木遁は初代とは比べものにならない、という認識でしかない

のだ。

そりゃ多少は尾獣だつて押さえられるし、いつか原作通りにナルトの見張り役になるんだろうけど…。

結局その頃には木遁を一般人の目の前でバンバン使うことになるのだから、今三代目のやっていることは本末転倒な結果になることは間違いない。

「火影様、あなたが僕を四代目の御子息の側に置きたいと考えていることは分かっています。僕はそれでもかまいませんが、そうなればどの道、僕の木遁は世間の目に晒される事になるのですよ。お願いします、考えを改めてください」

「そこまで知った上じゃったか…」

「あなたはお優しい。僕の木遁は九尾のためにある物ではなく、ナルト君のためにある物なのだとお考えなのでしょう」

そう俺が言い切ってから、二人の間には長い沈黙が降りた。

これ以上俺から言うことはないし、これで考えを改めてもらえなければ、俺も素直に三代目の意志に従うとしよう。

しかし、そう思った矢先に三代目が長い沈黙を破って大きく息を吐いた。

天井を仰いで、顔の前で組んでいた手をストレッチをするようにグイッと伸ばす。

「火影…様？」

「………そこまで言われては仕方ないのう。何、お前さんに言われずとも、他の人間から小言の様に言われとったことじゃ」

「…やっぱり」

どいつもこいつもまったく！　なんてぷりぷり怒る三代目に、思わず俺は小さく肩を震わせる。

きつと相談役と三代目はぶつかかる事も多いのだろう。しかし、何だかんだでそれで釣り合いが取れている気がする、と俺は思った。

「では、僕はこれで御前を失礼いたします。わがままばかり言ってますみませんでした」

「どんな小さな声も里の繁栄に繋がる大きな意見…。ということにしておこうかの」

「ははは…」

しかし、

「親の心子知らず…か」

俺が居なくなつた後の部屋の中、一人小さく三代目がそんなことを呟いているなんて、俺は知る由もないのだった。

三連休の使い方

「ヒヤッハー！」

という叫び声と共に、テンション高くソファーにダイブ！

本革のひんやりとした感触と、スプリングの反発に軋む音が気持ちいい。

気分の良さに思わずニヤリと笑って手足を思い切り伸ばすと、久々の感触に己の体が喜んでいる様に思えた。

それから反動で宙に放り出されたクッションを手でキャッチして、それをぐいっつと胸に押し付けるように抱き込む。

ああ…、ソファー最高。

「ふふふ、久々の連休だし、何するかなあ」

三代目に直談判をしに行った日の翌日。

元々今日は休みの予定だったが、急遽休みを増やして三日間の連休という形になったのだ。

俺への対応についての話し合いをするから、上層部の意向が固まっ
てから任務に戻ってもらう、と。

いくら友人の居ない俺とて、休みにやりたいことが何も無いほど無
趣味じゃない。

それにもうそろそろ武器の整備もしなければならぬし…。

ま、でも今日はゆっくりと体を休めて、外出しなければならぬ事
は明日に回せばいいだろう。

「おーい、コトリー！ 俺だよ、イルカー！」

…と思った途端にこれだよ。
しかし「俺だよイルカ」ってダジャレみたいだな、なんてしようもないことを考えつつソファァーに手を突いて起き上がった。

「よっ！」

「…よっ、じゃなくてだな。何で俺の家知ってるんだよお前」

「任務を言い渡された時、ついでに火影様から教わったんだよ」

あの狸爺…、イルカが可愛いからって俺を売りやがったな。

俺はついイルカに気付かれない範囲で密かに舌打ちをするが、まさかこのままイルカを放置するわけにも行くまい。

理由は簡単、絶対に騒いで下手すりゃ窓から侵入しようとしてくるから。

俺の家には木遁に関する貴重な書物があるため、俺以外の人間が入りできないように様々なトラップを張り巡らせているのだ。だからこいつが無理矢理侵入しようとなんてしたら…。

「取り敢えず上がれよ。どうせ今日は休みだし、用は中で聞く」

「おっっ」

「でも部屋の物に不用意に触れたりするなよ」

「？ 何でだよ」

「トランプが仕掛けてあるからな。お前ぐらいなら余裕で死ぬる」

「……じ、冗談、だよな？ あはは」

「まあ、気になるんだったら試してみればいいさ。ただし納得する暇も無くあの世行きだけだな」

「……………」

青い顔をしてキョロキョロと辺りを見渡すイル力だが、それでも帰るといふ選択肢は頭がないようだ。

相変わらず変に度胸のある奴だな。そして忠告を聞かないほどの馬鹿じゃなくてよかった。

仮に将来ナルト辺りが来たら、どれだけ忠告しても勝手に書棚の戸を引いたりしそうだ。

取り敢えずイル力をソファアに座らせて、俺は飲み物を入れようとカウンターキッチンへ向かう。

…しまった。すぐに出せるものがホットコーヒーとアイスコーヒーぐらいしかない（後は水道水）。

カフェイン中毒が裏目に出たか…。いやそもそも人を招くこと自体が無いのだから仕方がない。

一応、本人に「ブラックコーヒーって飲める？」と聞いたがやはりダメそうなので、カフェオレにすることにした。

うーん、せめて茶の葉ぐらいは置いとくべきか？

「はい、カフェオレ。…それで用事って何？」

「ん、ありがと。用事…は、別にないけど」

「…ない？」

「ない」

てつきりなんかこう、聞きたいことがあるとかだと思っていただけだ。

イルカがあっけらかんとそんな事を言うものだから、ちょっとだけ俺もポカンとしてしまった。

しかしすぐにハツとして、いかんいかんとコーヒーを啜る。

「いやあ、コトリっていつつも一人でさっさと帰っちゃうしさ。昔からどんな家に住んでるのか気になってたんだよな」

「あー…そう」

つまり遊びに来ただけ、と。

俺、今日何週間か振りの休みなんだけど。と邪険にあしらう事は出来なかった。

「んー、でもなんか、思ったより普通の部屋だなあ」

トラップが張り巡らされてる時点で普通じゃねえ。という言葉もなるとかコーヒーと一緒に飲み込んだ。いくら俺でも空気は読める。あと、興味津々でキョロキョロと落ち着かない様子が、犬みたいで可愛いだとも断じて思っていない。断じて。

わざわざ影分身しなくても、イルカが来てくれれば癒されるのに。とかも思っていない。絶対に思っていないぞ！そして俺は猫派だ！！

「…普通って、どんな部屋だと思ってたんだよ」

「すごい殺風景で、生活感がまったたく無い部屋かな。こう…その人を表す物がまったたくないと云うか」

「俺にだって趣味の一つや二つあるぞ…」

猫に変化した自分の影分身を愛でるとか…ゲフンゲフン。

「…そういや俺。結局コトりのこと何も知らないよな」

「まあ、俺もイルカのこと大して知らないしな」

「そう！俺達もつとお互いに分かり合う必要があるんだよ！」

ガタツと立ち上がって叫ぶイルカに、ちょっとだけ身と心を引く俺。しかしイルカはそんなことはもちろん、机の上に飛び散っているカフェオレにも気づかず熱く語りだす。

…うん、聞き流そう。

こういった少年漫画のノリは本当に勘弁してもらいたい所である。俺は熱血系ヒーローでも、主人公のライバルでも、倒したら味方になる敵でも、最初は強かったけど気づいたら噛ませ犬になってる敵でもないっての！

〈数分後〉

「ってなわけ！ だから、なっ！ いいだろコトリ？」

「あーうんうん、いいんじゃないかなー」

「よっし！ じゃあ次はいつ空いてる？」

「んー、明日も明後日も休みだケドー？」

「分かった、明後日の朝八時！ 第二演習場集合な。遅れんなよ！」

「おう任せとけ任せとけー……って、え？」

「それじゃ、おじゃましましたーっ！！」

「ちょ、おい！」

…え、いや、ちょま。いつの間に修行の流れになってんの？

俺って一応暗部所属のエリートなんだけど。

明日も明後日もやりたいこと山積みなんですけど！

「お、俺の三連休……」

それでも約束を破るつもりが無い辺り、俺も甘いなあと一人寂しくため息を吐いた。

三連休の使い方（後書き）

たまにはセリフたっぷりです。

イルカの将来

「……イルカ」

「うん……」

「お前……才能無いわ……」

「……自分が良く分かってる」

かの有名な発明家、エジソンは言ったそうだ。

「天才は1%のひらめきと99%の汗」

これは一般的にはいくら才能があっても、努力をしなければ意味が無いという意味で使われる。

が、しかし俺はそうは思わない。

何故なら、99%の努力と共に1%の才能が必要だということは、裏をかえせば才能が無ければ努力は無意味である。という解釈が出来てしまうからだ。

ていうか元凡人の俺から言わせてもらえば、努力を出来る奴はそれだけで才能があると言って間違いない。

俺だって命の危険がなかったら努力なんて出来なかった。

……ま、結局何が言いたいかと言うとだな。

「人間、出来る出来ないじゃなく、適材適所だと思わないか？」

「え？ 前置きとなんかちがくね」

「いやいや、才能って別に一種類しかないわけじゃないだろ」

汗ダクダクのイルカに、スポーツドリンクと新しいタオルを渡しながら言う。

しかしそうやって汗ひとつかかずに口を動かさ俺に、どこかイルカは「不公平だ」と感じているようだった。

実際は俺が汗だくになって努力している過程がすつ飛ばされているだけなのだが、そんなのはイルカからしてみれば知らないことである。

ただし、それは俺にも言えることなので、不満気なイルカなんて放つてさらに口を動かした。

「俺は才能ってのは”最初からなんでも出来る事”ではなく、”伸びしろが人よりも多くある事”だと思ってる。つまり、磨けば磨くほど光る原石！ ただ、それを見わけるのは相当難しいけどな」

「…それはコトリには、」

「無理！」

「だよなー」

なぜ納得されてしまったのかは分からないが、実際に無理な物は無理なので反論はしない。

周囲から落ちこぼれ扱いされていたナルトだって、カカシや自来也、あるいはサスケの手によって将来立派な忍者になるわけだ。

そしてその可能性を生まれたばかりのナルトに見出した四代目火影は、相当の千里眼を持っていたと言えるだろう。

…ただの親馬鹿かもしれないけど。

つまり四代目ぐらいの実力がないと無理ってこと。俺には到底無理だ。

「んー…でもまあ…」

言いながら、ちらつとイルカを見る。

当のイルカは落ち込んでみたり、希望もあるかもなんて考えてみたり、じつと見つめてくる俺に疑問符を飛ばしたりと百面相をしているわけなんだが。

とーぜん、俺は「海野イルカ」が将来どんな人物になるのか知っている。

「イルカは面倒見いいし、教え方もうまいし、結構真面目だし。アカデミーの先生なんか向いてるんじゃないかな」

「アカデミー…?」

「そう、それにイルカちっちゃい子とかの面倒見るの好きだろ」

「うん…アカデミー、か」

あれ？　もしかして、イルカは今まで前線で活躍する忍者以外の道

は、考えたことがなかったのだろうか。
と、イルカの「そんなの考えたこともなかったぜ」的なリアクシヨ
ンを見て思う。

だとしたら俺は初めてイルカに教師の道を志させた人。ということ
になるんだけど…。

…まさか、それでストーリーがどうこうなるって事はあるまい。
むしろ知る人ぞ知る裏の功労者、って感じになれてちよつとかっこ
いいんじゃないだろうか。

いや、俺もそのうち「ヤマト」として前線に出ることになるのだけ
れど。

「おほん！ まあ教師を志すにしても、中忍にならなければ何も始
まらないんだがな」

「うぐ、…センセエ！ 忍術の指導お願いしまあす！！」

「今日は最後まで付き合っけど、今度からは担当上忍に言えよ」

俺も明日からまた仕事なんだからな。

はあー…。

イルカの将来（後書き）

ようやくイルカの話が一段落したので、次はカカシ。

猫面の謎

暗殺戦術特殊部隊。

という部隊が公式に存在している以上、まさかそれぞれがバラバラかつお互いのことを何も知らずに任務をこなしている訳はあるまい。ちゃんと暗部の中にもいくつかの役職があつて、その役職を務めている者達が火影様の命を受けて動くのだ。

俺はその中でも新人であり下っ端なので、まだまだ勝手が分からない部分が多い。

しかしたとえどんな下っ端であろうとも、暗部に所属する者、皆が必ず集まる施設が存在するのである。

「…先輩。なんか怖いんですけど」

今の俺は、威圧感たつぷりの殺気が目の前に立つカカシ先輩からバンバン飛んでくる、という謎の状況下に立たされていた。

の、だが、そんな気味の悪い状況の原因は良く分かつていて…。

…まあうん、件の「カカシ先輩発言」が原因なのは間違い無いだろう。

後、三代目辺りから今後の俺の扱い方針について、聞かされたりしたのかも知れない。

どちらにせよ俺が根本的原因なのは間違いないのだが。

「なんで怖いんだと思う？」

「えー」と、大体予想はつきまず、けど」

先輩、あなた周りは見えてますか。ここ暗部の活動本拠地ですよ。

一瞬そう尋ねようかとも思ったが、この発言を逆手に取られてからかわれそうな気がしたのでやめた。

というか、先輩ともあるう人がこの状況を理解していないはずが無いのだから。聞くだけ無駄である。

「じゃあ白状しなさいな」

いやだから、言えるわけありませんって。

冷や汗を流しながらあまりの気まずさに身を振るが、先輩の問い詰めるような威圧感が変わらず。

故に、俺は未だに先輩の意図をはかりかねていた。

有意義に（？）使用することができた先日の三日間の休み。

まあ細かいことは省くにしても、取り敢えずその休みの間に木の葉上層部での話し合いには決着がついたようで。

一に、緘口令を敷く。二に、許可が無い任務時以外の使用は禁止とする。三に、情報が漏れた場合は速やかに他人と成り変わることを。

という、言っただけじゃ「今までよりちょっと縛りが緩くなりました」、程度の制約が三日間の話し合いの末に設けられたのだった。

俺からしてみれば、どうせ流通の激しい木の葉で存在自体の秘匿を

貫くには無理がある。
としか思えないのだが、はたして木の葉の上層部は一体どのような認識でいるのだろうか。
特に、俺の今の名前とやたら似ている、ダンゾウの意向は気になる所だ。

そんなこんなな出来事があって、今の俺は三日振りの任務に当たろうとしているのだ。

もちろん、まったく心配に思っていなかったわけではない。

しかし俺は最初からちよつとしたイタズラだとは思っていなかったのだから、そう深刻に物事を考えることもできず。

「気になって調べたらそれっぽい人物が該当して、鎌をかけちゃいました。てへぺろ」で済ませる気満々だったのだ。

…結局、済ませることは出来なかったわけだが。

「先輩：見逃してくださいよ。せめてそれぞれ一般個人として、又の機会に改めて話しましょう」

「なに言ってるの、それじゃあ意味が無いでしょうよ」

意味って、だから何だよそれ！ そう怒鳴りつけたい所だったが、やはり周りの視線を気にして遠慮した。

「…まったく、そんなに頑なに拒否するんなら仕方ないね」

わざとらしく吐かれたため息と共に、カカシ先輩はスツと俺との距離をあげた。

仕方ない、と。まるで駄々をこねる子供に対するような口調で言う

先輩。

思わずむっとして顔をしかめるが、暗部の面によりそれは伝わっていないだろう。

しかし、やはりそれは俺にも言えることで、先輩の表情は面により一切伝わってこないのだ。

警戒を深めるが下手なことではできない俺。

先輩も俺からは何も出来ないのだと理解しているのだろう。

小さく笑う声がしたかと思うと、先輩は素早く印を組んだ。影分身だ。

「ッ…！」

逃げる間もなく俺の背後に分身が現れ、ガツと勢い良く肩を掴まれたかと思うと、そのまま逃げられないように固定されてしまう。

息を飲んで体を強ばらせる、がやはり本気で分身から逃れようとは思わない。

というか本気で逃げたりなんかしたら、後で盛大にからかわれる気がする…！いくら俺でも、もう予想は出来るぞ！

…だが、だからと言って素直に従うわけにもいくまい。と、俺は抵抗の意を示すために声を荒げた。

「せ、先輩！ 僕は暗部は隊員の素性も功績も公表されない機関だと聞き及んでおりますが！？」

「その通り。でも、仲間内じゃ割といい加減だから安心していいよ」

「ちょっとおおお！？」

なにそれ初耳なんだけど！ 暗部ってそんないい加減な部隊だっけ！？

…いや、まあ、確かに原作じゃ平然と面を外してた気もするけど。いやしかし、いやいやいやいや！！

力任せに体を動かして拘束から脱出しようとするが、カカシもここまできてむぎむぎとオモチャを逃すつもりも無いらしく。

ぬうっと伸びてきた先輩の腕に、俺の面は……。

「あ、ちょ、アーーーーッ！」

猫面と猫面

猫面ねこめんの下から猫面ねこめん。

とは抵抗出来ない俺の面をあつさり奪い去り、その下から現れた素顔をまじまじと見た力カシ先輩の率直な感想である。

それを聞いた俺は「ああ…、これ猫面ねこめんなんだ」なんてお間抜け極まらない感想を漏らしてしまった。

結果、先輩含め辺りの暗部全員がポカン。

そりゃ自分の顔を「これ」扱いる人間もそうは居るまい。

しかし、俺からしてみれば今の自分の顔も所詮は他人の物でしかなかったので、特別パニツクに陥ったり冷静さを欠いたりすることもなく。

その隙を狙って、瞬時に先輩の拘束の手から逃れるのであった。

「猫っばい顔ってなんぞや…」

猫好きだからこそ分からない。

あんな爪で引つかかれても指を齧られようとも、全てを許してしまうような愛らしい存在に俺の顔が似ているだど!?

…それともまだ俺が十三歳だから許容範囲、ってそんな訳ないか。

「んー…あ、猫面ねこめんがあるじゃないか」

先輩もそんなニュアンスのことを言っていたし、俺の顔と猫面は似

ているものと思っただろう。

自分の顔なんてそうじっくり見ること無いし（どうせ髪の毛も適当に切ってもらっただけだから熱心にいじること無い）

任務行くのは嫌だけど、給料を頂いている以上はこのままサボタージユってわけにも行かないから。

帰ったら猫面と俺の顔の共通点でも探してみようかな。

「…と思っただけど、そっぴや先輩に取られたままだったな」

今頃、暗部同士で「あいつお面する意味ないんじゃないか」的な冗談でも言い合っているのだろうか。

だとしたら非常に腹立たしいが、怒るだけ無駄だというのも目に見えている事。

感情的になつて怒るぐらいなら、ガキ臭くてもまだ同じように仕返しした方がいい。

イタチごっこになるのもまた目に見えている事…だけどね。

「仕返し…ねえ」

どうせ先ほど素顔は見られてしまったのだし、と変化などの手間をかけることなく本拠地に戻る。

人数が減っている所を見ると、いくつかの小隊は既に任務に出た後だよっだ。

俺もいい加減任務に出ないと怒られる、がそれも面を取り返してやらだな。

「あ、テンゾウ。お前一体どこ言ってたのよ」

「先輩が変なことするからいけないんです。まあそんな遠くには行ってませんから」

「嘘おっしやい。火影岩の上に居たって情報が入ってきてるんだからね」

「……………」

先輩、床にさつきまで無かった犬の毛が落ちてますよ。
わざわざ忍犬まで使って、何してんだこの人…。

「…里内なんて問題ありません。そんな事より早く面返してくださいよ」

「えー、もうそのままでもいいんじゃない？」

「良くありません。内部の事情は知りませんが、外部に向けて素顔を晒すわけには行かないんですから」

「いやだって、そんなに変わってないよ？」

「……………」

ああこの人、性格が悪いとかじゃなくて、分かかってやってるんだな。とふと思った。

もう先輩明らかに肩震えてるし。他の暗部の人間まで絶対に笑ってるし。

新人いじめか、いじめなんだなそうなんだろこの野郎共め。その面ごと顔面殴りつけたくなるからやめろ！

…いや、落ち着け俺。先輩は全部分かっついて挑発してきているのだから、それに乗せられたらさらに笑い者になるだけだ。

俺はそうやってなんとか心を落ち着かせて、無言のままに先輩に向けて面を催促するための手を突き出す。

いいから早く面を超越せ、と。あとあんたの煽りに反応するつもりもねえから、と。

にこやかに対応できていない時点で反応しているのかもしれないが、もう知ったこっちゃない。

すると、流石の先輩でもここが止め時だと分かったのだろう。

特に抵抗を示すことも無く、すんなりとその手に持っていた俺の面を渡そうと腕を伸ばしてきた。その時！

シユバツと印を組み、最高スピードでの木遁発動。

元々面は木を材料としているので、面から木を生やすのは朝飯前である。

カカシ先輩もまさかわざわざ俺が仕返ししてくるとは思っていなかったみたいだ。

いきなり面の内側に生えてきた木に驚いて、渡そうとしていた俺の面を取り落とした。

そして、それと同時に落ちる先輩の面。二つの面が同時に地面に落ちて音を立てるといっのは、いまいちシュールな光景である。

って、あれ？

「え、先輩。面の下でも口布してるんですか」

「え？ うん、いつもしてるけど」

「…息苦しいでしょう」

「いやー、呼吸の仕方一つで案外変わるもんだよ？」

「……チツ」

「！？ 何で舌打ち！？」

その後、先輩から教わったのだが。

いくら暗部といえど隊員同士で世間話とかもするし、そうやって話している内に仲良くなることもあるのだと。

だから居酒屋に飲みに行ったりすることもあるわけで、そうなるそれぞれ素性を明かさないのもどうかと思う。

じゃあまあ、暗部とか関係なく仲良くなったってことで良いか！

…という流れがその昔から多くあり。その結果、今では素顔を明かさか明かさないかは個人の自由。という暗黙の了解が出来たんだそうだ。

なので、昔はちゃんと機密情報が漏れない様に厳密に管理していたらしい。

大体、忍者つてのは手の内が敵にバレてはいけないので、本当は先輩みたいにビンゴブックに載るなんて事は絶対にダメなのだ。

「写輪眼のカカシ」とか「コピー忍者」とか。

そりゃ先輩ぐらいの実力があるなら殆どの敵は返り討ちにできるだろうが、時には先輩より強い奴が、写輪眼を求めて先輩を狙うことだってあるだろう。

いやむしろ、賞金をかけられて、それ目当てに命を狙われなんかしたら…。そう思うとゾッとする。

それなのに、暗部でさえもこんな状況だなんて…。

一体この世界の忍者ってなんなんだ、と俺としては非常に不服に思うところである。

「敵を欺くにはまず味方から」という言葉を知らないんだろうか。すごい巧妙な技術を持ったスパイとかが居たらどうするんだ！

といった旨のお話を先輩にしたところ、

「テンゾウ、お前心配しすぎでしょー。そんなのそうそう無いって

とのお言葉をいただきました。

いやあんたが楽観的すぎるんだよ！

猫面と猫面（後書き）

漫画にあれこれ言うのもどうかと思うんですが。

いくらなんでも、見つかった瞬間に”どこの手の者”が分かってしまふ忍者はどうなんだろう。

と私はよく思います。潜入任務とか諜報任務のときは額当て外したりするんでしょうか…。

それと、ヤマト隊長の顔つきについてですが。

最初は隊長の顔つきを表す表現が分からなかったのですが、どうもファンの間では猫目で通ってるらしい…ですね。

確かにアーモンド型のつり目と言われるとそんな気がしてきたので、ここでも猫目ってことにしようと思います。

岸本先生はどういうつもりで描いてるのかな…。

ヤマトの趣味

「野宿です」

そうして無表情なままに放たれた抑揚の無い俺の言葉に、隣に立つ先輩は

「あちゃー」

と疲れていて会話さえもめんどくさい、というのがまる分かりのいい加減な返事を返した。

本日もいつもの様に、カカシ先輩とツーマンセルで任務に当たっている俺。

それなりに遠出でハードな任務だったものだから、二人して疲労困憊。当然、口数も少なく会話は最低限必要な分しか交わされない。夜明け前に任務に出たにも関わらず、気づいたらもう日が暮れてるんだもんよ。

その上にまだまだ里に帰り着くのは時間がかかりそうで、このまま行ったら夜通し移動し続けることになるのは間違いない。

…というわけで、冒頭の通り俺達は野宿をして体を休めることに決めたのであった。

しかし野宿の上に晩飯は兵糧丸のみ、というのは暗部であろうとも中々うんざりとしてしまう状況だ。

先輩だって俺と同じ気持ちなのは、先ほどのいい加減にも程がある

返事が物語っている。

野宿の何が一番嫌って、周囲への警戒のために寝ることもままならない、という所。これではうんざりするのも当然だ。

だが、少し待っていただきたい。

画面の前の皆様は覚えているだろうか、俺が使うことの出来る木遁には、こういう時にとっても便利な術があるのだと言ったことを。

思わず「でもお高いんでしょう？」と言ってしまうこと間違いなし、カカシ先輩も驚かすには居られない、驚愕の術である。

「というわけなので、先輩はちょっと後ろに下がっててくださいね」

「…何が、というわけなので、なのかさっぱりなんだけど」

「まあまあ、野宿の準備をするだけですから」

「はあ？」

野宿の準備、といってもこの状況で火を焚くわけにもいかないから、先輩からしてみれば俺の発言は意味不明なことだろう。

因みに、俺はもったいぶって説明をしていない…様に見えるが、実は面倒なので説明を省いているだけである。

術については帰ってから巻物でも読んでもらった方が楽だ。

…そして、先輩に下がってもらったら、印を組んで木遁発動。

「木遁、四柱家の術！」

え？ 説明をしない割に術名は読み上げるんだな、だって？

世の中大事なのはノリだと思っよ俺は。うん。

「ええー…」

というわけで、突如現れた木造の建物に、案の定先輩はポカンとアホ面を晒していた。

使い手が初代しか居ない木遁の術であるがために、どんな凄腕であつても若い人間はどうしても木遁には詳しくないのである。

もし仮に知識だけがあつても、実際に見たことがなければこの術には驚いてしまうことだろう。

「中々便利で使い勝手の良い術なんですがね。まだ勝手が良く分かってなくて」

そう言いながら俺が小屋の中に足を踏み入れると、先輩もその後が続いて中へと入ってきた。

深い森の中で土地があまり確保できないこともあり、小屋の広さは六畳程度も無い上に作りも甘いため、ぶつちやけ見た感じは犬小屋だ。

そしてその原因が、術の精度うんぬんではなく、完全に俺の無知さなの悲しい。

この術、実はかなり使用者のイメージや知識に、出来が左右されてしまうのである。

材木を切り出す等の手間が省かれるだけで、技術は大工が使用するものと変わらないのだからそれも当然だ。

「でも無いよりはましだと思いませんか？ カカシ先輩」

「…ましどころか、これでも十分快適に一夜を明かせるよ。最早こ

れ野宿じゃないし」

「ええ、問題は目立つ点だけですかね。後始末も僕さえ居れば簡単ですから」

「んー…、土遁と併用、…とか？」

「それはつまり…木遁、アリの巣の術！ って事ですか」

「いやアリの巣は無いわー」

「別にモグラでもオケラでもなんでもいいですけど」

「どちらにせよ無いわー」

アリの巣の術。俺はいいと思うんだけどな。
ただし地下に広い空間を作るとなると、さらに高度な技術と知識が必要になるんだけどね。

>>一週間後 自宅にて<<

ポーン…ポーン…

「…」

寝不足かつ疲労のピークという事もあり、たまの休みにも関わらず俺はぐったりと寝込んでいた。

が、こんな時に限って何故か鳴るチャイム。

来客なんて普段はほとんど無いのに、本当になんでこんな時に…！

（その上、来るのはイルカだけというこの悲しさ）

…しかし、トラップがあると知っているからなのか、イルカは絶対にチャイムを鳴らすことはない。

つまりこの来客は確実にイルカではない、ということだ。

どうせセールスか何かに決まっている。ああそうだそうに違いない。

ピン…ポーン…

「とつとどつか行けやくそが…」

お口が悪いのは機嫌が悪いからです。今回ぐらいは多目に見てくれ。

「…行つたか」

二回目のチャイムが鳴ってから、一分ほど経つただろうか。

玄関側から物音がしない所を見ると、どうやら来客は忍者らしいが、まさか白昼堂々と盗みを働きに来たということもないだろう。

そして、もう二度と家のチャイムが鳴らないことを願って、俺は疲れを取るためにまた深い眠りにつこうと目を閉じた。

その瞬間だ。

カランコロン シュババババツ カカカカカツ 「ちょ、っと!？」

文字に起こすと何がなんだか分からないが、その場でしつかりと聞いていた俺は瞬時に理解することが出来た。

これは誰かが家に侵入しようとした時に、まず一番最初に発動する、クナイが投擲される罠が発動した時の音だと。

下忍でも避けられるぐらいの、ただ相手に侵入を諦めさせるために存在する罠だ。

いくら相手に100%の非があるとしても、無闇矢鱈と殺しては面倒なことになるだけだからな。

…で、何が問題って、その罠が発動した音の直後に聞きなれた人物の声が聞こえたことなんだが。

「何してんですか…カカシ先輩」

「…ねえ、お前の家ってどうなってんの」

「先輩こそ、居留守使われたからって不法侵入はやめてください」

罠が張られている場所に行くと、案の定そこには声の主であるカカシ先輩が居た。

…罠を避けた勢いで足を滑らせ階段から落ちた、という非常に間抜けな格好の状態で。

「それで先輩。知らないはずの僕の家に、一体何のご用でいらっしやっただんですか」

「なーんか、棘のある言い方だよね」

「…先輩との任務の後に、続けて暗殺任務へ一人で向かい、今日になって漸く休暇を取れた僕に対して何か一言」

「……ごめん」

「いえ、僕こそ罷なんか仕掛けてすみませんでした」

「あー、うん…うん？」

多分、先輩は「だから何で罷が仕掛けてあるんだよ」なんて事を思っているに違いない。

しかし今の俺は、やはり先輩よりも睡眠のほうがよくほど重要なのだ。

今する必要の無い説明などは全部省いて、早く事を済ませてしまおうと、取り敢えず先輩を中に招き入れることにした。

「…いや、まあ、すぐ済む事だし…ここでいいよ」

のだが、先輩がそう言うので俺もそれに従う。

まず任務関係であることはありえないので、きっと今回の訪問は先輩の個人的な用事のためなのだろう。

一体個人的な用事ってなんなんだ？　なんて内心思いつつ、俺は表面上は素直に頷いておく。

そして尋常じゃなく重たいまぶたをなんとか持ち上げながら待っている、先輩は「しまった」と言わんばかりの表情をした後、辺りをキョロキョロと見回して…。

「ああ、良かった良かった」

…どうも、階段から転げ落ちた時に、持ってきていた物を落としてしまったようだった。
地面に転がっていた紙袋を見つけてホツとする先輩は、あまりかっこいいとは言えない。いやむしろ間抜けである。
先輩…なんか今日ボロボロですね。という言葉はなんとか飲み込んだ。

「本…ですか？」

「そ。テンゾウに丁度いいと思ってね」

「？ はあ、ありがとうございます」

俺に丁度いいってなんぞや。早速紙袋を開けて、中に入った本を取り出す。

それは雑誌ほどの大きさと薄さをした、三冊の…建築やインテリアに関する本…だった。

見た瞬間にハツとして、一週間前の任務であった出来事を思い出す。まさか、先輩。

「わざわざ買ってきてくれたんですか!？」

「わざわざ…って訳じゃないけど。術の鍛錬には必要なんでしょ？」

「え、ええ…」

それにしても、先輩がわざわざ面倒を見てくれることじゃないと思うんだが。

…もし、もし先輩が本心から俺を思って、俺の将来のためにこれを

プレゼントしてくれたのだとしたら。

俺は当然ながら純粹にそれを嬉しく思うし、ただ俺の扱う術を先輩が有意義に利用するためのプレゼントだとしても、結局は俺の糧になるのだから、それはそれでとても喜ばしいことだ。

いや、何にせよ、ここは無粋な詮索をするところではないだろう。自然とニヤつく自分の顔に言い訳をするように、先輩が俺を利用しようとしているのではないか、と疑いながら。

でも結局、俺は先輩の心遣いに本心から喜ぶことしか出来なくて。

「…えっと、ありがとうございます。カカシ先輩」

俺って…現金だなあ。

そんなことを思いながら、先輩が俺に送ってくれたプレゼントを眺めた。

ナナシとナルト

生きるために修行をしているのに、なぜ俺は今チャクラ切れで死にかけているのだろうか。

ぼんやりとそんな事を思った。ひどく矛盾している、おかしい、と心臓はバクバクとうるさいし、肩で息をしているものだから息苦しくて仕方が無いし。

視界はすでに薄暗くて、突っ伏した地面から伝わってくるひんやりとした感触が、唯一の救いだった。

…ああ、遠くで師の声が聞こえる。

俺がこうして死にかけているにも関わらず、まったく心配する様子もなければ、寧ろ怒りに任せて怒鳴ってばかりいる男。

實力はどれほどの物か知らないが、少しの間この男と過ごした俺の感想は「知識ばかりがあつて、頭でっかちの男」というものだ。どうせ大して強くないんだろ。俺にだってそれぐらい分かるさ。

知識があるから、その知識通りに行かないとパニックになって、俺に八つ当たりをしてくる典型的な馬鹿。

くそ…、なんで……なんで…！

「し、にたく…ない」

呟いた途端に意識は途切れた。

という、苦すぎる幼少期の思い出が俺にはある。

木遁という特別な力を身に付けてしまったからこそ、悲しい出来事だ。

まあ、結局俺は今こうして元気に暗部で活躍しているのだから、あの男に色んな面で打ち勝った、と言うことになるんだろうがな。

そうとでも思わなきゃやってられない。二度と同じ思いはしたくない、そう決心せずには居られないほどに苦しい修行だったのだから。

「その点、ナルト君はどうなのかね」

暗部の面をつけ、絶賛任務中の俺の視線の先には、金色のツンツン頭をした少年が居る。

ベンチに座ってポーツとしている孤独な彼は、勿論皆さんご存知である主人公のうずまきナルト少年だ。

暗部に入ってから一年が経ち、大分精神的にも余裕が出てきた俺は、今回この様な任務に一人で就かされたのだった。

うずまきナルト及び、九尾の監視護衛。

ぶっちゃけ放置しているだけでいいのだから、暇なことを除けば相当楽な任務なのだが…。

誰もやりたがらないことや、尾獣の監視ということを考慮して、任務ランクは一応Aである。

俺は喜んで任務引き受けたけどね。だってゆっくりと体を休められるからさ。

しかし問題は精神的な苦痛だよ。ああ…、よみがえるアカデミーで

のぼっち生活。虚しい。

「…おや」

なんてことを考えていたら、ふとナルト少年がベンチから立ち上がった。そしてとぼとぼと去って行く小さな背中。

原因は少年に冷たすぎる視線を向けて、ヒソヒソ話をはじめた主婦たちで間違い無いだろう。

木の上からだと微妙に声は聞こえないが…。読唇術を使えば会話の内容もこちらには筒抜けだ。

まだ将来、彼にも多くの友人ができると分かっているから良いのだが、なんとも良心が痛む光景である。

…果たして、家族や親しい友人と強制的に離され、二度目の人生（それも過酷な）を強いられることになった俺と。

腹の中に九尾を宿され、里中の人間から迫害されることになったナルト少年。

一体どちらの人生の方が、辛く重たい物なのだろうか…。

なんてね。

彼の方が過酷に決まっている。なにせ幼い間ずっと、彼は周囲の大人から悪意や殺意を向けられ続けるのだ。

俺だったら確実に挫け、自殺を謀ることだろう。

もし腹の中の九尾の存在なんて知ってしまったら、周りの人間への復讐なんてことまで企ててしまうかもしれない。

何はともあれ、ナルト少年には幸せな人生の終幕を迎えてもらいたい所だ。

街行く親子を羨ましげに見つめる彼を追いながら、俺は心の底から

そ
う
願
っ
た。

ナナシとナルト（後書き）

できれば一日一回は更新したいのと、シリアスを引きずりたくない
ので短めですがアップ。

私が書くシリアスは安っぽいので苦手です。シリアスというよりシ
リアル。

なんかここ数日、お気に入りや評価がちょっと多くて嬉しいです。

「小説家になるう」ってちゃんと評価してもらえるのが嬉しいです
ね。

読んでくださっている方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱい
です。ありがとうございます！

黒猫とナルト

「あれ？」

思わず首を傾げて声を上げる。

「いや、えっと、うん。ナルト少年の家って、絶対にあっちじゃないよね？」

しかし彼はなぜだか、一般人が入らないような、深い森目掛けて足を動かし続けているのだ。

いくら平和な木の葉の里とて、深い森の中となれば命に関わるような危険な動物と遭遇することもある。

そんなことになったら、俺はとつても困るのだが…。

任務放棄はもちろん。九尾復活、阿鼻叫喚の地獄絵図がふつと頭に浮かんでは消えてゆく。

仮に死ななくても、九尾化したりして、森の中が大変なことになってしまふのではないか？

そして、それが全部俺の責任ってことになっちゃうんですよ。たまたまもんじゃない。

「ナルトくん…どこ行くんですかー」

ついに森の中に入ってしまった彼は、さらに奥へとずんずん進んでいく。

これでまだ彼が楽しげならいいのだが、その重たい足取りを見ているとこちらまで暗い気分になって来るのだ。

というか、なんとなく、なのだが。

「富士の樹海…」

で、自殺する人みたいな雰囲気がある、ような。

「……………勘弁してくれよ！」

慌てて印を組んで変化する。

引き止めるにしても、暗部の姿では警戒されるだけだ、と判断したからだ。

いやむしろ…、人間というだけで今の彼にとっては警戒の対象になつてしまつかもしれない。

そうとなれば同じ年頃の少年に変化したって無駄だ。俺は思い切つて猫に変化してみることにした。

世の中にはアニマルセラピーという言葉もあるのだから、きっと人懐っこい猫と戯れれば暗い気分も吹っ飛ばさ。

俺はいつも通りの黒猫に変化すると、木の上からナルト少年の目の前へと下り立った。

「ニャア」

「え…わっ、な、なんだつてばよ！」

最初はポカンとしていた少年だが、俺が彼の足元でゴロゴロと喉を鳴らすと驚いて声を上げた。

そういえば、野生の動物は九尾の気配に怯えて、彼には近づかないという話を聞いた覚えがあるな。

それなら、この少年の大げさにも思える反応も納得だ。

「ナアアン」

「ハラ、へってんのか？　でもオレ、なんももってないってばよ」
そんな事を言いながら、彼は地面にしゃがみ込んで俺の背中を撫でる。
気持ちよさそうに目を細めた俺の姿に、また彼は驚いた様だった。
優しいが、その反面で怯えている様な拙い手つき。人間ではダメだと思っただけに猫にしたが、どうも彼は動物でさえあまり慣れていない様子だ。
せめて動物が周りに居れば、ゴンの様な野生児に…ゲフンゲフン、いやなんでもない。

「わっ。…へへ、くすぐったいってば」

気にすんな。とでも言うように彼の頬を舐める。
猫の舌はザラついて痛いので、出来るだけ優しく舐めて、あとは鼻を押し付けて匂いを嗅ぐようにじゃれついた。
オラオラ猫かわいいだろ、何だったら俺の様に生粋の猫好きになっ
てくれてもいいんだぞ！
そんな勢いで、じゃれまくること数分。
ふと、少年が体を強ばらせたと思うと。

ぐうううううう

恥ずかしさに赤面する…なんてことはなく。少年は顔をしかめて、俺を撫でる手を止めた。
空腹感で何か嫌な出来事でも思いだしたのだろうか。
ふむ…、ここは猫として彼を気遣ってやる素振りを見せねばなるまい。

俺はスルリと彼の手から抜けだして、素早く木の上に登った。少年の悲しげな表情に心が痛むが、今は我慢だ。

木の上は見晴らしが良く、ほんの少しだけ高い雲に近づくことができる。

本当は地面でくつろいでいる個体でいいのだが、せっかくだから空を飛んでいる生きの良い奴を…。

…まあ、殺しはしない。殺しはしないから。

木の上からダイブして、そのままの勢いでガブツと口の中に小さな鳥を放り込む。

そしてやって来る浮遊感に身を任せ、落下地点はピタリ少年の目の前だ。

「ニヤツ！」

「……あ、ありがと、ってばよ」

引きつった顔で礼を述べる少年。どうやらスズメはお気に召さなかったらしい。

もちろん分かった上での行動だが…。ああ、でもスズメの丸焼きは中々イケると思うよ、俺は。

「でもオレはいいから。な？」

ピーチクパーチクと俺の口の中で悲鳴を上げるスズメを見て、困ったようにそんなことを言う少年。

無益な殺生をするつもりは無かった俺は、素直にそれに従ってスズメを逃がす。

慌てて俺達から逃げていくその後姿を見る限り、翼が折れた何てことはないだろう。

「ニヤアオー」

もう一度少年の足元をくるくると歩き回り、ピタッと立ち止まって上を見上げた。

腹が減ったのなら家に帰りなさい。と主張してみる。

…俺の思いが伝わったのかは定かではない。しかし少年は俺の目をしっかりと見て。

「うん、もうかえるつてばよ」

そくだそうだ、子供はカラスが鳴いたら家に帰るもんだ。

いや、まだ中学生程度の年齢の俺が言うことでもないけどさ。中身は結構なおっさんなのだが。

そして俺は納得したようにまた一鳴きして、軽い足取りで少年の前から去る、

振りをして。

木の葉の里の市街の方向へと歩いて行く少年を、先ほどと同じように木の葉の中から見守りながら、俺は一人ごちるのだった。

「はー…ナルト君。俺は休む気で任務してるんだから、心配させないでくれよ」

え？ 仕事？

いや、これでもちゃんとしてるんだって。

黒猫とナルト（後書き）

ナルトがなぜ樹海の様な森に入ってしまったのか、というのはご想像にお任せします。

ナナシの日常（前書き）

たまには日常系のほのぼのした話が書きたいなあ、と思いついて。ちよつと手抜きではありますが、簡潔にナナシの日常をまとめた物を書いてみました。

ナナシの日常

>> 早朝、四時半過ぎ<<

「ただいま、マイホーム！」

バフンツ、とソファアに飛び込んだ。

生前からずつと夢だった俺の高級ソファアだ。最早、任務帰りにソファアに飛び込むのも日課である。

こんなことをしているとスプリングの消耗が早いのが困り物だが、まあ所詮は消耗品だし。

高給取りのくせに、その金を使う暇がない。というのも悩みの一つなので、良からう。

「あー、猫飼いてー」

木分身が、もうちょっとチャクラを喰わない術だったら、ペットも飼えるんだけどなあ。

>> 六時半<<

むくつとソファアの上から起き上がる。計、二時間の仮眠だ。

もっと長時間寝れば良いのだが、本日はイルカの忍具購入に付き合わされる予定なので、それもできない。

しかし…、せめてベッドで寝れば良い物を。

自分自身に悪態を吐きながら、汚れを落とすべく風呂場へと向かった。

ああ、それにしつかりと朝食も取らねば。ちくしょう、家事めんどくさい。

>>八時半<<

わざわざ、他里まで行って買ってきた本を読み漁る。

大抵は建築やインテリア、日曜大工に関する本だ。

小説も嫌いなわけじゃないのだが、もっと文化の高度な世界の小説を知っているからか、どうにも読みなれないのが難点だ。

…とかなんとか言いつつ、順調に本棚には建築関係以外の本も溜まりつつあるのだがね。

これも全部カカシ先輩の所為だ。どうしてくれる。

>>十時<<

「って訳なんだよ！ どう思う!?!」

「…どうって言われても…。俺は忍具を見るつもりで外出してるんだけど、なんでお前とこんな所に来なきゃいけないんだ」

「予定変更！ もーっ、俺も我慢の限界なんだよ。悪いが付き合っ
てくれ！」

せつかく参考になりそうな巻物持ってきてやったのに。なんで甘味処なんかにいるんだろつか、と俺は嘆いた。

どうやらイルカには人間関係で、どうにも我慢ならないトラブルが起きてしまったようだ。

よっぽど頭にきたのか、イルカにしては珍しく、周りの視線等をまったく気にせず大声で愚痴っているが…。

「何で俺なんだ…」

「なんとか言ってくれよコトリ！ あいつコトリには頭上がらないしね」

「ああ、うん…」

因みに、イルカが腹を立てている人間が、俺がアカデミーに入っただけで暴言を吐いた人間だ。

というの知るの、それから一時間ほど経った時のことだった。

>>十七時<<

「……かーらーすーなぜなくのー」

カラスの勝手でしょー。

無抑揚に紡がれたメロディーに、近くで庭先の掃除をしていたらしい年配の女性が、ビクツと肩を揺らした。

ああ…、夕方だよ…。イルカの愚痴に付き合っ、なんだかんだしていたら、もう一日の終わりだ。

なんて嘆かわしい。まるで世界の滅亡が迫っているような、重々しい雰囲気で呟いた。

「まあいいや…帰ろ」

どうせ今日の夜からまた任務だしな。ちくしょう！

>>一時<<

今日は久しぶりの、先輩とのツーマンセル任務だ。

やっぱり一番気心が知れているのは先輩だ、ということもあり、先輩との任務はいつもよりちよつとだけ楽しい。

…人を殺さなきゃいけないような任務で、「楽しい」もどうかとは思っただけだな。

人間ってのはどんなことにも適応できてしまう能力があるらしい。最初は嘔吐してまで嫌がっていたようなことでも、気づけば当然の様にこなしてしまっているのだ。

ああ、でもやっぱり。

「カカシ先輩、聞いてくださいよ。今日の休暇は散々で…」

こうして愚痴を聞いてくれる人がいるからこそ、俺は穏やかな未来を信じて任務に就くことができるんだ。

俺が吐いた暴言について、「何してんの三歳児…」と呟く先輩を見てあははと笑う。

それはいつもと変わらぬ満月の夜のことだった。

昼、一時。

任務と報告を終えて自宅に帰ってきた俺は、またソファアークにダイブして言う。

「ただいま、マイホームっ！」

ナナシの日常（後書き）

これは忙しい日の一例なので、休みの日とか割りとボーッとしてる
時も多いんですよ。多分。

好き嫌い

カカシ先輩が暗部を抜けてしまいました。

いつかこの日が来るってのは勿論分かっていたのだけれど、一番良くしてくれた先輩が居なくなるってのは中々寂しいもんで。

で、先輩が抜けるのと同時に俺が”ベテラン”の部類に入るのだ、という事に気づいた瞬間、俺はちよつと虚しくなっていました。

元々、忍者ってのは死亡率の高い職業だ。中忍に昇格するための試験でさえ、死傷者が多く出る。

そして暗部はそんな忍者の中でも、さらに死亡率の高い部隊…。いくら俺とて、暗部として仕事をしていく内に、仲良くなった隊員はちよくちよく居た。

だが仲良くなつた途端に死んでしまうような奴も居て、仲間が死ぬ度にちよつと泣いたり落ち込んだりしたのだ。

…それに慣れてしまうまでは、ね。

気づいたら仲間が死んだと聞かされても、大して心を揺り動かされる事が無くなる。

目の前で悲惨な死に方をされても、それはまったく変わらない。

もう二度と会えないという現実は無視して、自分も気を抜けばそうなるのだということだけ、強く強く自分に言い聞かせて。

そんな日々が続いた結果がこれだ。

気づいたら、俺がベテラン。まだ十年も勤めていないのに、もう。ちよつとだけ泣きたくなつた。結局泣けなかつたけど。

そんなこんなで時が経てば、当然暗部にも新入隊員というものが入ってくる。

だが、新入隊員の大体が若々しくも初々しくもない、からかいがいの無い奴なのがなんとも言い難い所だった。

カカシ先輩がやたらと俺をいじめてきた理由が良く分かったよ…。

そっぴや暗部養成機関なんて物があつたね。

そりゃそこで生産される人間らしくない人間より、リアクション豊富でちゃんと後輩らしい俺の方が良いだろうさ。

あ、でも、俺がベテラン…。いや、分隊長になってから入ってきた隊員にも、ちつたあマシなのが居たんだよ。

俺は分隊長になってからは、何があつても平常通り、世間話でもするよつな態度が出来るように努めているんだが（先輩がそうだったので）。

唯一、俺の隊の隊員の中で「うちはイタチ」だけが、世間話どころか自ら進んで可愛い弟の話をし始めるような男だったんだよ。

…ああ、うん。やっぱりお前つてブラコンなのな。

事あるごとに、「は犠牲になったのだ…」と言いたくなる俺のお口をどうにかしたい、今日この頃です。

「隊長。少し相談したいことがあるのですが…」

「ん？ なんだい」

おずおずと話を切り出してきたイタチ少年は、これでもまだまだ十歳の子供なのだ。

幼い頃に戦争に狩りだされて精神を病んでしまったと聞くが、それでも可愛い弟のことを話すときには子供らしく可愛い表情をする。

一度だけ弟君と撮った写真を見せてもらったことがあるのだが、写真に写る彼はそれはもう愛らしい笑顔をしていた。

イケメンはやはり幼い頃からイケメンということなのか。どちくしよう。

「弟…についてなんですけど」

ああ、やっぱり。

彼が自分から話を切り出す時は大体が弟のことなのだ。

だから「相談がある」なんて言われたら、ほぼ確実に弟に関することだと思っただけ間違いはない。

今回も最初からそうだと想定していた俺は、「はは」と軽く笑っていつも通りに笑顔で口を開いた。

「また修行でも強請られたのか」

「いえ、そうじゃないんです」

イタチの言葉に、少しだけ俺は驚いてしまった。

最近の彼の話は、「弟が忍術に興味を持ち始めて困る」という類の物ばかりだったというのに。

「確かに、アカデミー入学の年も迫っていて、うちは一族の誇りを持っているのならそれも当然」

だなんて言っただけ、お兄ちゃんに憧れるサスケ君かわいい！ という

結論を毎回出して切り抜ける様にしていたんだが…。

相談の内容が違つとなると、もしかしたらそれも通用しないかもしれないな。

あまり真剣に考えて、真剣にイタチのために動くってこともしたくないんだがなあ。

…何故つてそりゃ、イタチやサスケに情が移つてしまうと、これからの展開にちよっかいを出したくなるだろ？

変に情けをかけて、うちはマダラに目をつけられたりなんてしたら最悪だ。

しかし、既に何度も相談に乗っている以上、突然蔑ろな対応をするなんて訳にも行かない。

俺は極力いつも通りを心がけて、話の続きを促すように言った。

「じゃあまさか…喧嘩か？」

「…そう、ですね」

「そりゃ珍しいこともあるもんだな…」

サスケに嫌われたくない一心で、時には両親さえも敵に回すイタチが…だと…！？

今度こそ、内心飛び上がるほど驚いてしまった。それでも表情に出さない様に努めはしたが。

「隊長…俺、こんなに何日も悩んだの初めてで…」

「ん…僕で力になれるかは分からないけど、一人で悩むぐらいな人に打ち明けたほうが楽だと思うよ」

「…はい。実は、どれだけ言ってもサスケが絶対に納豆を食べてくれなくて…。俺、どうしたらいいのか…っ！」

「……………」

ああ、やっぱりこいつブラコンだわ。

今更ながら、改めて再認識してしまった俺だった。

好き嫌い（後書き）

とうか、ヤマト隊長の体になってから、油物などの味付けの濃い食べ物を受け付けなくなってしまうたナナシからしてみれば。

好き嫌いについてなんて、何か言える立場じゃ無かったりします。

背脂ギットギトのラーメンなんか食べた日には、確実に死んじゃう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6607x/>

ナナシの八ナシ

2011年10月29日12時02分発行